

10月に予定していた山崎裕侍さん(北海道放送プロデューサー)の講演会がコロナ禍で中止となったため台本をご紹介します。

2020年4月26日放送

第57回ギャラクシー賞 報道活動部門優秀賞  
2020年(第63回)日本ジャーナリスト賞受賞

# ヤジと民主主義

～小さな自由が排除された先に～



2019年7月の参議院選の時、札幌で自民党の応援に入った安倍首相にヤジを飛ばした男女や無言でプラカードを掲げようとした人たちが警官に取り囲まれて排除された。番組では当時の映像を集め、元警察官や専門家、治安維持法違反で投獄された方などに問題点を聞き多角的に検証。ヤジすら言えない社会の先に民主主義が問われていると警鐘を鳴らす。

(山崎裕侍氏のJCJ賞受賞発表より)

## もくじ

・ヤジと民主主義	p1
・ギャラクシー賞	p24
・菅政権とメディア支配	p25
・ズーム爆撃だけじゃない	p27
・NHK朝ドラ「エール」	p30
・森下経営委罷免国会請願	p33
・会員からの質問	p34
・会員の声	p35
・事務局より	p36

NHKは政治権力から自立を！

**NHKとメディアを考える会(兵庫)**

ニュース No.54 2020年10月

〒650-0044

神戸市中央区東川崎町1丁目5-7

神戸情報文化ビル3F文化村内

電話 090-5054-7171 (事務局)

<http://nhkwatchers.web.fc2.com/>

(郵便振込先口座) 00930-9-120056 NHKとメディアを考える会(兵庫)

## NHK朝ドラ「エール」

評論

### 古関裕而はだれにエールを送ったのか

～今も歌い継がれている「戦時歌謡」とは～

内野光子(歌人)

(「現代短歌」11月号より要約)

作曲家の古関裕而(1909～89)をモデルにしたNHKの朝ドラ「エール」は、今春始まったが、コロナ禍で中断、9月に再開した。NHKは「東京五輪2020」という「国家的行事」にエールを、「復興五輪」とも銘打たれ、古関の出身地、福島県へ「エール」を送る企画であったが、五輪の延期で目論見は外れた。放送中のドラマは、自伝や事実とも異なる混乱した喜劇的な展開となっている。

今年2月、古関の出身地の福島民報社と日本コロムビアが「古関裕而生誕110周年記念・あなたが選ぶ古関メロディーベスト30」を実施した。1位は「**高原列車は行く**」(丘十四夫作詞)だったが、いわゆる「戦時歌謡」といわれる「**暁に祈る**」「**愛国の花**」「**ラバウル海軍航空隊**」「**若鷺の歌**」が入っていたのである。たしかに、これらの歌は、敗戦後も、私の両親や兄たちにも歌われ、小学生だった私も一緒に歌っていた記憶がある。1945年8月15日の後、大人も子供も戦時下と同じ歌を歌っていたこと、現在にあっても戦時下の歌謡が「ベスト30」入りをしていることに気づかされる。さらに、敗戦後の歌謡曲の作詞家と作曲家、歌手のほとんどが戦時中にも活躍していた人たちであった。作曲家でいえば、古関裕而、古賀政男、服部良一、作詞家では、西條八十、サトウハチロー、高橋掬太郎、野村俊夫たちである。

敗戦を挟みながら歌われ続けた歌はどのようにして世に送り出されたのか。古関はいったいだれにエールを送ったのかを探りたい。

#### 「戦時歌謡」はどのようにして制作されたのか

ここで、「戦時歌謡」とは、政府や軍部及び関係団体、あるいは日本放送協会(NHK)・新聞社・雑誌社・映画会社などの企画による、大政翼賛的な国策を企図する公募歌・委嘱歌に限った。「古関裕而作曲の戦時歌謡の主な公募歌・委嘱歌一覧表」を作成してみた。マス・メディアの企画によるものが圧倒的に多いが、企画した組織が作詞も作曲も公募する場合がある。古関の場合は、公募した入選作を歌詞として古関に作曲の依頼がある場合、はじめからプロの作詞家と古関裕而の作曲との組み合わせで委嘱される場合とがある。1941

年以降は、企画主体が作詞・作曲を誰にするかを、情報局と山田耕筰が中心となって再編、設立に至った業界団体、日本音楽文化協会にゆだねるケースも多くなる。公募や委嘱の過程は見えにくく、軍部や情報局による「懇談」や「助言」「指導」なる統制が埋没している可能性も高い。

なお、古関・西條のコンビによる「戦時歌謡」は、37年「**皇城入場**」から、「**若鷺の歌**」「**海の初陣**」、45年2月「**神風特別攻撃隊の歌**」に至るまで十数曲に及ぶ。敗戦後には、並木路子や美空ひばりなどの女性歌手による歌謡曲も増え、「**1947年への序曲**」「**平和の歌**」「**希望の街**」「**花売馬車**」などを発表、その題名も歌詞も一変した。軍部、政府、マス・メディアが一体となって、国民の士気をあおり続けた作詞家と作曲家が、一転、戦死、戦場での病死・餓死による犠牲者への「鎮魂」を歌い、戦病者、遺族、家を失い、職場も失った多くの人々への「明るい励ましの歌」として「エール」を送ったとされる。

#### 古関の戦時下の作曲活動をどう評価するのか

古関の戦時下の活動について、すでに多くの人たちが言及している。櫻本富雄は『歌と戦争』(アテネ書房2005年)において、「行進曲王・古関裕而の軍歌群」の一章を設けている。古関の歌がどのような歴史的背景のもとに成立し、利用されたかの視点の重要性と戦後の長きにわたって活躍したことに着目する。さらに、あるインタビューでは、古関の軍歌は全部「短調」なので、そこに反戦の思いを込めたと深読みする人たちがいるが、要するに、あの時代に発表できたということは「迎合的であった証」で表現者の抵抗としては、「最後は沈黙しかない」という趣旨の発言をしている。戦時下に発行、発表された資料の収集への超人的な熱意とその実証的な研究に支えられた貴重な発言に思われた。また、戸ノ下達也は『音楽を動員せよ—統制と娯楽の十五年戦争』(青弓社2008年)において、古賀政男、古関裕而、藤山一郎、井口基成、宮田東峰、山田和男、須藤五郎ら音楽家の言説や「戦争犯罪」と「戦争責任」とを曖昧にしてきた論争などの限界と問題について指摘している。また、NHK「エール」に便乗した形で出版

された、いずれも若い著者による刑部芳則『古関裕而』（中央公論社）と辻田真佐憲『古関裕而の昭和史』（文芸春秋）は、古関の戦争責任について明確に語ることはしない。

### むすび

前述の「一覧表」を作成してみて、「戦時歌謡」の公募・委嘱の企画主体は、①軍部や政府 ②民間のマス・メディア ③日本放送協会（NHK）であることがわかった。古関の場合、②の新聞社による「露営の歌」、映画会社による「**若鷺の歌**」が代表的なもので、レコードもヒットしている。「暁に祈る」のような官主導による①に属する曲も決して少なくはない。「軍に依頼されて作った曲はほとんどない」という遺族の言葉は事実と異なるだろう。「国民歌謡」及びその後の番組で、NHKが独自に企画した曲も多いが、①②であってもNHKの各種のラジオ番組によって繰り返し放送され、拡散されたものも多い。太平洋戦争末期のNHK「国民合唱」には「**突撃喇叭は鳴り渡る**」「**決戦の海**」「**比島決戦の歌**」「**台湾沖の凱歌**」などが登場している。曲名や歌詞には大本営発表そのままの「必死」さが伺われ、NHKが「戦時歌謡」の普及に果たした役割は絶大なものがある。しかし、NHKによるこうした歴史の総括はいまだきちんとなされないまま、今日に至っていることは、「エール」の放送にも見てとれよう。

「**露営の歌**」の即興的な作曲過程やNHKの「ニュース歌謡」への対応に見るように、古関は、率先して時局やメディアに追従し、1か月に数曲を作った時期もある。どこまでも勝ち戦であった大本営発表そのままに士気を高め、ときには情緒に訴えた歌詞につけた曲は、国民にエールを送ったというよりは、天皇への忠誠にことよせ、戦局拡大のために戦地や銃後の人びとの戦意を高揚させ、人的資源確保をしたい軍部への加担ではなかったのか。大本営海軍報道部の平出英夫大佐がコロムビア主催の時局講演会において、いみじくも述べたように、「音楽は軍需品なり」であったのである。この発

言が戦時下の音楽業界には、音楽やレコードの必要性を正当化したものとして歓迎されたという側面もある。

古関自身は、自伝『鐘よ鳴り響け』（集英社 2019年、原本は主婦の友社 1980年刊）において、戦前の作曲活動を「国民の役に立った」「歌は国境を越えて愛された」などとポジティブにとらえたまま、敗戦後も作曲活動を続けた。そして現代にあつては、大方のマス・メディアによる、敗戦の前後を問わず「国民に愛され続けた、天才作曲家」との評価が定着しつつあることに、私は、危惧を覚えたのである。

ここでは省略したが、古関裕而の「戦時歌謡」の一曲、一曲の成り立ちや足跡をたどってみると、その身の軽さ、節操の無さは、一人の人間としての「戦争責任」を認めないわけにはいかない。同時に敗戦後の活動についても「戦後責任」が問われるべきだと考えるようになった。

戦時下における体制への「迎合」と「抵抗」の形はさまざまであったろう。敗戦直後の、GHQによる他律的な戦争責任追及後は、「当時を知らないものに何がわかるか」の論法のみで切り返すか、「生活や家族のためには仕方ないことだった」という当事者や周辺の声が大きくなった。加えて、彼らの言動を擁護し、「よく耐えた」と再評価する流れも出てきた。しかし、戦時下の各人の現実、生活実態や当時の社会情勢を知ること自体が重要なにも関わらず、不都合な現実には目をつむり、怠ってきたことが、この75年間もの間、戦争責任も戦後責任も曖昧なものにしてしまった。その根底にある「天皇の戦争責任」が問われなかったことと、決して無関係ではないだろう。今からでも遅くはない。知らなかったことを知って、学ぶことを大切にしていきたい。

古関裕而が、間断なく敗戦以降も作曲活動を続け得たこと、マス・メディアは疑問もなくそれを受容していること、古関メロディの人気を支えた国民の在り様、敗戦前後で変わらぬ活動を続けた作詞家、歌い手たちの検証も今後の課題となろう。



キンモクセイ

# 古関裕而作曲の戦時歌謡の主な公募歌・委嘱歌一覧(抜粋)

(1932年4月～1945年8月) 内野光子 作成

① 放送年月・レコード発売年月

② 曲名

③ 作詞者

④ 企画・公募・委嘱・推薦団体など

⑤ 主題歌挿入映画(監督名)・公開日ほか

①1932/4 ②肉弾三勇士の歌 ③清水恒雄(3席入選) ⑤1席 中野力作詞・山田耕筰作曲 2席 渡部栄伍作詞・古賀政男作曲

①1936/11 ②空を上げば ③水島洋 ⑤松竹「少年航空兵」(佐々木康監督)36/9/18 公開

①1937/9 ②弾雨を衝いて ③高橋掬太郎 ⑤松竹「さらば戦線へ」(清水宏・原研吉ほか)37/8/24

①1937/9 ②露営の歌 ③藪内喜一郎(2席入選) ④東京日日・大阪毎日新聞社公募 ⑤1席「進軍の歌」本多信寿作詞・筒井快哉 新興キネマ「露営の歌」(溝口健二)38/2/17

①不明 ②上海特別陸戦隊 ③福士幸次郎 ⑤NHK「放送軍歌」第2輯収録 37/10

①1937/1 ②南京陥落 ③久保田宵二

①1938/1 ②戦場だより ③八木沼丈夫 ④支那駐屯軍司令部推薦 ⑤「討匪行」(藤原義江作曲、1932年の作詞者と同じ)

①1937/10/18、1938/4 ②愛国の花 ③福田正夫 ④NHK 国民歌謡 26 ⑤松竹「愛国の花」(佐々木啓祐)42/11/1

①1941/7/16、1938/5 ②婦人愛国の歌(抱いた坊やの～) ③仁科春子(2席入選) ④『主婦之友』公募、NHK われらのうた ⑤1席は上条操作詞・瀬戸口藤吉作曲(皇御国の～)

①1938/7 ②銃後県民の歌 ③羽賀松子 ④福島民報社公募

①1938/9 ②愛の聖戦 ③西城八十 ⑤松竹少女歌劇団「世界に告ぐ」

①1939/3 ②満州鉄道唱歌 ③藤晃太郎 ④満鉄・満州新聞社公募

①1939/4 ②戦時市民の歌 ③中川二郎(懸賞入賞) ④大阪市選定・NHK 国民歌謡

①1939/5 ②国都音頭 ③藤田虎雄 ④満州新聞社公募

①1939/7 ②防空青年の歌 ③柴野為玄知 ④陸軍省推薦・NHK 国民歌謡 48

①1939/10 ②満州体育の歌 ③可能洋二 ④満州帝国体育連盟制定

①1939/10 ②排共の歌 ③鈴木芳一 ④満州帝国協和会制定

①1939/12 ②乙女の戦士 ③西城八十 ⑤松竹「新女性同盟」(原研吾)40/1/15

①1940/4/8 ②暁に祈る ③野村俊夫 ④陸軍省馬政課・NHK 国民歌謡 63 ⑤松竹「征戦愛馬譜・暁に祈る」(佐々木康)40/4/7

①1940/1 ②荒野の涙 ③久保田宵二 ⑤新興キネマ「荒野の妻」(深田修三)40/2/1

①1940/3 ②畝傍の松風 ③西城八十 ④日本文化中央連盟制定 ⑤紀元二千六百年奉祝国民歌

①1940/5 ②乙女の首途 ③西城八十 ⑤松竹「女性の覚悟」(渋谷実)40/5/30

①1940/9 ②起てよ女性 ③西城八十 ④陸軍省制定・大日本国防婦人会選定

①1640/9 ②御稜威あまねき ③協調会産業福祉部撰詞 ⑤産業安全歌

①1940/12/9、1940/12 ②嗚呼 北白川宮殿下 ③二荒芳徳 ④海軍省・陸軍省・内務省・文部省選定・NHK 国民歌謡 74 ⑤9月4日、飛行場の事故戦死と報道

一覧表は1932年4月～①1945/5/20～6/9 ②ほまれの海軍志願兵 までの全78曲から前半の25曲を抜粋したものです。